

傳道と革新

著者	堂本, 敏雄
雑誌名	龍南
巻	2 0 9
ページ	9 2 - 9 7
発行年	1929-02-20
その他の言語のタイトル	伝道と革新
URL	http://hdl.handle.net/2298/9064

傳導と革新

堂 本 敏 雄

(一)

高濱虛子に「道」と云ふ題の小説がある。或る鐵道驛に至る近道が、誰がこしらへるとも無く自然と出来上つて何度柵をゆつて通らせぬやうにしても何時しかそれがこはされて道となり人々は平氣でその上を通るやうになる。これは唯簡單な短い俳諧趣味の小説であるがよく考へると傳統と云ふものゝ性質を説明してゐるやうである。

誰が踏むとも無く生じた道——而かもそこを通る人々はすつかり親みきつた安易さを以つて通る事が出来る、その上それが便利である。便利で無くなれば自然と新しい方向に變る——こう、考へて來た時に虚子の小説『道』を以つて私の今問題としてゐる傳統と云ふ事の比喻に爲した所で差支はあるまい。扨て僅か村から驛に至るのでさへ自ら成る道がある。況して人間生活を流るゝ大きな道——傳統が無からねばならぬ

否事實存在してゐるのだから傳統とは何ぞやと云ふ事が問題となる。

(二)

傳統とは讀んで字の如く傳はる——綿々として續くこと、試みに辭書を引いて見ると、傳は授、續、布、遺、轉、移であり統は端緒、本始總要系絡綱紀なりとある。即ち語源的に云へば傳統とは規範的の道(綱紀)が連續發展することであり又連續發展する道そのものを意味するのである。

然らばこゝに云ふ道の内容は何を意味するか私は老子の「道萬物之始也是非紀也」の道を意味するのでは無いそんな廣汎な抽象的原理を言ふのでは無い。此處で云ふ道の内容は人間の精神的活動及肉体的活動の所産にして或る目的に適ふもの一切を意味する即ち一般の用語に従へば文化及文化財と稱せられる所のものを言ふのである。勿論この文化財の中には文

化價值の客觀的具体化物たる工藝物建築繪畫をも含めてゐる。

即ち傳統とは文化が連續發展すること(性質)連續發展する文化である。

(三)

前の定義に依つて文化を傳へる者、運載する者は何であるか問題となる。文化を造りし者傳へし者、運載せる者これは言ふ迄も無く人間である。然しそれは單なる個々の人間では無く集團の人間を意味する。この傳統が集團の人間の所産である所に重大なる意味を見出す。

一、傳統は各集團に依つて異なる

一、各傳統は互に影響し合つて反撥同化の過程を経て更に高次のものに發展して行く。

(四)

傳統は各集團に依つて異なる氏族、部落、士農工商の階級、ギルドの如き職業團體、民族等に依つて夫々相違するのである。或る氏族獨特の傳統士族獨特の傳統或る同業組合獨特の傳統

傳導と革新

が存在する。こう言つて來ると人は重大なる疑問を抱くであらう。「傳統を連續する文化だと定義する以上文化はあらゆる人間に通ずるものなるが故に傳統がそれを生んだ集團に依つて異なる筈は無い」と。この反對に對しては私は連續發展する文化と云ふ概念を持つて來ればよい。勿論文化の一般性はその價值の一般性を認めると同様に充分認めるのであるが、それは完成されたる文化に對してであつて現實の文化に對しては無い。發展進化の過程にある現實文化なるが故にその發展の獨特の方向と、獨特の性質を有するのである。即ち文化そのものの理想が各集團に依つて異なるわけで無く、理想文化に至る現實文化の發展過程が異ると云ふ意味で傳統が異ると云ふのである。尙此處で私は階級ギルド等にも異なつたる傳統——異つたる現實文化を認めたのであるが、これは民族のそれに比すれば微少なもので、而かも、眞正の意味に於ける文化を有する事は稀である。これは F. Toynbee の所謂 *primary culture* としての性質をギルド、階級は有する事が大であるから勢、部分的利益をのみ追求する事を團體の目的とし勝である故である。それ故私は傳統を民族的傳統に限定して考へて見やうと思ふ。何となれば民族こそは時間的にも空間にも

最も強固なる集團であり、文化創造、運載の最適任者であるからである。

(五)

傳統を民族的傳統と限定した時に最も明瞭に我々は傳統の意味を感じ得る。ギリシャの文化、ローマヘブリューの傳統が綿々として傳り、これ等の傳統が衝突反撥同化して更にゲルマンの傳統が加はり現今西歐の文化が生れ、更に英、佛、獨夫々の獨特の傳統となつて現在に及んでゐる事は西洋史の教へる所である。東洋にあつても印度の傳統たる佛教、支那の儒道が對立し、それが互に影響し合つて、日本の祖先崇拜、國體觀念惟神の神人觀に融合された事は明白な事實である。即ち各傳統が反撥同化の過程を経て互に影響し合ひ更に高次のものに發展して行く事は歴史の明證する事實である。

(六)

各傳統が反撥同化するの如何なる場合か、傳統が高次の者へ發展するのは如何なる場合か此處に於て革新と云ふ事が意義を持つて來る。傳統は最初に述べたやうに、安易、熟知便

利等の感を伴ふ所の一つの道である。誰もが容易に馴親んで通る。而かもそれが規範の性質を持つてゐる事は勿論である。そしてそれはそこを通る人からは規範だとは少しも感ぜられないのである。云はゞ自分からこしらへ、喜んで大切に自分の道だと云ふ感じが濃厚である。即ちこの場合は傳統と自らの生活が何等の間隔も無く調和してゐるのである。従つてこの時に於ける吾人の唯一の仕事は傳統に對する享受であり既存の傳統を鑑賞する事である。然るに時代の經過と共に傳統を生み出したる民族心(Wundeの用語に従ふ)の創造方は傳統の固形化に依つて障げられるに至る。即ち傳統が自己保存力を極度に發揮して自らを神聖化し、傳統化し努めて原形を保たん事を要求する。この場合かつて親みを以つて默從せられた道はその規範性を強制的のものに變へてしまふ。そして時代／＼に進歩する社會生活の變化に適應せなくなる。要するに傳統が停留腐敗して融通が利かなくなるわけであるこの時である。偉大なる批評家を必要とするのは。

停滯と平板、と腐敗とに傾き、傳統本來の發展性を失つた——而かも拘束力だけは極度に發達して來た舊文化に對して新文化への道を示すものは批評の力である。M. Arnoldの説

いた如き力強い批評である。この批評的精神の優越に依つて革新が齎される。

(七)

革新に二つの形態がある。

一、人間精神の自由なる活動が化石したる傳統に依つて阻止された場合、之を打破して潑瀾清新なる創造的活動を起させんとする革新

二、傳統の形態化して現れたる政治、法律經濟が國定して社會生活の進化を阻止する場合、之を打破して新制度を齎せんとする革新。

前者の著しい例は文藝復興、宗教改革であり、後者のそれは佛大革命、我が國の大化改新明治維新等である。勿論この兩者は事實上かく截然と區別さる可きものではないが、前者は主として宗教、文藝、哲學思想等に於ける、宗派、主義、思想体系等の變遷に於て起る革新であり、後者は所謂社會改革政治革命等に云ふ革新である點を以て便宜上分類出來ると思ふ。

扱て此處に上げた二種の革新の歴史的事例としてあげた事件

傳導と革新

はいづれも同一地域に於ける傳統の革新即ち單に時間的革新であるやうに見へるが、實は異つた空間的傳統の接觸に依る革新である。文藝復興に於けるギリシャ傳統とヘブリュー傳統の接觸、宗教改革に於けるローマ傳統とゲルマンの自由傳統の接觸、大化改新に於ける日本の傳統と支那の傳統の接觸明治維新のそれに至つては云ふ迄も無い。

要するに革新を齎すに必要なのは批評の精神であり、これは社會に於ける積極的進歩的性格の人々の力に待つ所が大である。特に第二の政治革新社會革新に至つては、*freedom of speech* が何よりも必要である

(八)

然らば傳統と革新との關係如何、革新はどの程度迄可能なりや？これは最も重大問題であり希臘の昔から現在に至る迄の一切の改造思想に關係ある問題である、從つて個々の事實に直面して何處迄革新が可能なりや、如何程迄傳統が腐敗固形化してゐるやを決定するより外に抽象的にその程度を決定する事は出來ない。

然し次の事だけは言へると思ふ。

—(五)—

一、根本革命は不可である。一切の傳統を破壊して根本的立直を行ふ事は不可能であり進化の上に好結果を齎さない

二、傳統の自然的發展にまかせて、無爲自然何等手を下さないやうな態度は不可である

三、何處迄も傳統を原形の儘保持せんとする態度は不可である、

(一)は革新を絶對的程度に迄可能なりと信する者(二)は決定論的進化を信する者(三)は人力を以つて進化の力を壓服し得ると考へる者であつて(一)(三)は人間の力を絶對的のものと過信したる安價なる樂天觀であり、(二)は人間の力を過少視たる非觀論である。この事を證明するに私は歴史的事實——

誰にも明瞭なる事實を引こう、自由、平等、博愛の三モットーをかくつけて勇敢に破壊を決定し、根本的立直しをやつた

——いや、やつたつもりの一七八九の佛大革命が果して、自由平等博愛の樂天地を齎したか？ 事實は正反對で、不自由不平等、不博愛の混亂社會を導いて、遂に Napoleon の武力に待たなければおさまりはつかなかつた。革命の徒は根本破壊を爲して根本的立直しに失敗した。之に對して英國に於ける革新が多く政治革命であるに止つて、即ち在來の傳統の腐

敗部分を除出し新生命を之に附與して、その上に建設を爲すので多く成功してゐるのは善き對照である。

(二)の例としては十八世紀以來の希臘や印度を見ればよい傳統の自然的發展が得られなかつたのみならず、嘗つて存在したる燦然たる文化は從に廢墟の中へ名残を止めてゐるのみである。

(三)何時の時代に於ても最極右の反動的態度を採る者が成功して後迄残つた試しが無い。時代の流と共に亡ぶ者、これが彼等の運命である。

(九)

そこで傳統と革新に對する正しき態度は明瞭となる。即ち以上の上の三極端の態度を修正綜合すれば善い。

『傳統をして腐敗固定せえないやうに自然發達せしめ、腐敗固定すればその部分だけ除去して、新生命を附與し常に既存の文化の上に新建設を爲すこと』

この態度からして吾人は常に享受と批評の精神を發揮せねばならぬことを知る何故なれば現存の傳統の價値を理解する爲には享受、鑑賞の能力を鋭くするを要し、傳統の固定化、平

板化を防ぎ革新への道を知る爲には批評の能力を鋭くせねばならぬからである。

(十)

最後に日本の現状に對して傳統と革新が如何なる意義を持つか、自分の考を述べて見たい。日本は今革新を要す可き時代である。私が先に述べた第一種類の革新は明治維新以來目まぐるしい程度に盛に行はれた。文藝上のイズムや哲學的思想の一起一伏や、宗教的傾向の變動等一通り經驗して來た。

然しこれとても未だ充分に自らの身を痛めて革新の生命を吹込んだとは言はれない。今からほんとの日本傳統に即した革新が行はれるのであらう。私はそれを信ずる。盛なる日本傳統の研究熱、再評價追体験享受の傾向がこれを示すものだと思ふ。

第二の革新即ち政治經濟上の革新は現時の日本の最も重大なる問題である。諸外國より幾分政治經濟上の發達の後れた我國は今や漸く革新の期に至つた。議會は思想國難、經濟國難の議決を爲し、朝野等しく、人口問題、食糧、問題、勞働問題、農村問題、産業の合理的統制、税制改正等を眞面目に

考初めた。最も困難なる勞資の問題も眞剣に研究され出したこれは喜ぶ可き傾向であり、普選布かれ、陪審行はれる現在としては當然の成行である。唯一つ遺憾なのは、健全なる批評力と享受力とを缺いだ一部過激の徒が我が國の傳統を無視して輕々にも第三インターナショナルあたりの翻譯的破壊法を擬せんとして不眞面目と無法を暴露した事である。傳統に對する正しき批評と享受とに基かざる翻譯的改造思想と改造方法とを私は斷乎として斥けるものである。

傳統に對する批評と享受こそ理想への革新の道を示すものである。

——昭和四年一月十三日——